



ると、垣根には、青い瞳色のすみれが芽吹く。時の両側で、それぞれの時間の流れを生きる、背中合わせのニコとヴァノ。

「さあ、飛び立て！ぼくが撃ち落ととしてやるから」

ニコとヴァノは、時間を自由に旅するだけじゃない。互いを愛したり奪ったり、殺すことだって自在にできる。

あるとき、ニコとヴァノは珍しく親友だった。そして、ヴァノはひとりの女性を愛し、彼女と愛し合った記念のマッチの燃えさしを大切に持っていた。ふたりは親友だったから、ニコもまた、ヴァノが愛している女性を愛するようになる。ニコはやがて、ヴァノに蠟燭を求め、帽子を求め、愛を、生命の火を求め、愛する女性とともにいつまでも幸せに暮らした。ヴァノのもとには、ただ、マッチの燃えさしだけが残された。

またあるとき、ニコは、「俺は、ハンターだ。ヴァノは鳥だ」と言い、銃を構えて、ヴァノが飛び立つのを待っていた。やがて、「鳥なんかじゃないー」はずのヴァノは、空へと羽ばたき、ニコが放った弾で撃ち落とされる。

### 「もうひとつの世界の魔術師

『ニコとヴァノ』の作者エルロム・アフヴェディ

アニ(Tim Akhvediani 一九三三〜二〇一二年三月は、何よりもまず、映画脚本家として知られている。二〇〇四年ビターズ・エンドが映画祭「イオセリアーニに乾杯！」を開催し、フランスで活躍するグルジア人映画監督オタル・イオセリアーニの作品を一挙公開した。同監督の初期作品『四月』(二〇〇二年カンヌ招待作品)や、伝説の天才画家を描いた映画『ピロスマニ』(シエンゲラヤ監督、一九六九年日本公開)の脚本を手掛けたのが、アフヴェディアニだった。そして、彼が書いた数少ない文学作品のひとつが、『ニコとヴァノ』である。

原書は、文学書というより小冊子のようならフな装丁で、表紙と裏表紙はピンク色。こじられた落書きみたいな挿絵が、あちらこちらにちりばめられている。それぞれの物語の登場人物は、たいていニコとヴァノの二人だけ。ときどき三人。(七人のニコと一人のヴァノが出てくることもある)。大きな事件は何も起こらないけれど、時の流れを勝手に速めてしまったり、二つの時間が同時進行したり、主体と客体がひっくりかえったり、名まえも存在もいつの間にかすり替わっている。そんな小さなイタズラやしかけが、ひとつひとつの物語に複合的に埋め込まれることで、読み手は「もうひとつの世界」を垣間見ることになる。

有名脚本家アフヴェディアニのいわば習作として、長く読み継がれてきた『ニコとヴァノ』だが、実は、思わぬところでも活躍している。外国人のグルジア語学習用定番テキストとして根強い人気を誇ってきたのだ。ルーツや語系統が謎に包まれた言語は世界に数多いが、グルジア語もそんな言葉のひとつである。グルジア文化への扉を開けたとき、「もうひとつの世界」への魔術師が、さらなる深奥へとわれわれを手招きしてくれる。

\* 初出は詩誌『<http://www.webri-le-essay/>』(文章の一部を加筆修正した。)

<http://www.mri-te-press.net/essay/bn1206.html>

